

リ性の反應を呈するにより知る事が出来る。  
其他サリチル酸、ホルマリン等あれども少しく手  
敷であるから略します。

貞一の日記(抜萃)(明治三十六年五  
月廿一日生男兒)

その母

明治三十七年七月十五日 母學校より歸れば、今日  
は十時過ぎし頃より熱出でし様なりと、ばあや  
はいふ、計れば 卅八度五分あり、例よりは少  
く機嫌悪し、夜はよく眠る

かゆ 一回(二盃) おもゆ三回 乳一回 夜一回  
午前六時 起 午後六時 眠る 午前中一時 間眠る  
七月十六日 熱なほ去らず 醫師の許に行く 初  
めほど 胸腹など 見らるゝ時は ほとなしかり  
しも、舌を見んと、口を無理に、開かせしより、

大聲にて泣き出す、

おもゆ一回 乳晝三回 夜二回

午前六時 起 午後八時 眠る

七月十七日 機嫌あしく、乳ばかり飲みたがる、

おもゆは例の半分ぐらゐづゝ飲む、夜に入りて

急に熱度昇り、卅九度六分あり、使を馳せて、向

野醫師を迎ふ、

おもゆ三回 乳晝二回 夜二回

午前五時 起 午後十時 眠る

七月廿一日 千葉より伯母君遊びに來られたり、

初めほどは はづかしがりしも 直に馴れたり、

晝寝して起きし時 伯母君抱きとられしを 母と

おもひしか 懐をさぐる故 傍にて 母笑ひしに

大聲にて泣きだす、  
ピアノを弄ふ時は 必らず本を片手にまくり 片

手にて弾く様 さながら譜を見てひくつもりらしく見ゆるも可笑し。

おもゆ三回 乳晝三回 夜一回

午前五時半起き 午後八時眠る 午前中一時間

午後三時間眠る。

七月廿二日 上の齒四枚になる

七月廿三日 雷鳴の烈しさに 恐れて母に抱きつき

きて離れず

七月廿七日 母に負はれて、金刀比羅神社に行き、

神樂殿の屋根に、赤く塗られし、唐團扇の紋を見

つけ、エー〜と指さす。

七月廿八日 父の肩を叩かせ居るを見 自分も父

の傍によりて 肩を叩く

七月卅一日 ビンボンの球を、板の間にて 彼方

此方へ投げ、ボン〜とぶを見て、大聲を出して

笑ひ 這ひまわりては喜ぶ、此の頃は馬の玩具に、車のつきたるものを、好きになり、いつも〜、

あちこちと、おしまわして遊ぶ、其他一體に帽子

でも、茶碗でも、どこまでとなく押し回はして這

ひ行くなり、機嫌はよろしけれど腹工合まだなを

らす(十七日發熱後は別に經過に變なく廿五日頃より日に四五回づゝ便通あり)

八月二日 今日まで、診察をうけ居りし醫師へは

行かず、内田といふ小兒科専門の醫師の許へ行く、

左程心配する病氣にはあらず 直に快くなるべし

との話に やう〜安心したり、

れもゆ四回(二梳づゝ) 乳晝二回 夜二回

午前五時起き 午後七時半眠る

晝寝 午前中一時間 午後三時間

八月四日 腹工合大によし、ババ〜とつゝけて云ふ

八月六日 醫師の勧めもあり、また両親の身体のためにもよろしからんと、温泉行を思ひ立ち、伊豆國修善寺に向ふ、十二時卅分の流車にて、新橋を出づ、偶然父母の全郷人にて、山本貞之助氏といふ方、其奥様、また佐々木信綱先生 など親しき方々と乗り合す、流車の動き出しより、物は珍らしきか、大きな眼をはつて、きよろくと外を見る、皆様の前にて 自分の藝を、すつかり御目にかけて、はめていらく、第一番にとつと、目次に萬歳といへば両手を上げることに、てうちくわばい、かつひてんくは近頃出来なくなれり、もはや卒業して仕舞つたのだと父はいふ、山北より三島につくまでは眠りてさめず、大仁より流車を降りて、人力車にて、修善寺に行く間、日は暮れ方になりて物淋しきか、父に抱かれながら、

母の車を、見かへりては、しくくと泣き出す！  
母の車、父の車より先き立てば、大聲にて叫ぶ、

かもゆ二回 乳五回、吉野せんべい一枚

午前五時 起 午後九時 眠る 晝寝三時間

八月七日 宿は大川といふ、座敷は 松の間とて

八疊敷なり、隣室に まさよさんといふ、可愛らしき、四歳ばかりの女兒あり、一所に遊んであげ

まししようと、傍へ来てくれれば、胸をついたり

また顔を つかみかゝつたり 亂暴をしては、可

愛い、姉さんを 困らす、

三階の階段を 獨にてすんく昇る 母兩手にて

後紐を 押へ居れば エーくといつて拂ひの

ける。

かゆ一椀 葛湯一椀 鶏卵二個 乳三回

午前五時半 起き 午後六時半 眠る

八月十日 隣室のまさちやんの一組は 歸られて  
 其の跡へ移る。こゝは鶴の間とて 十疊敷なり  
 其の隣の 伯母さん 暑いでしようよと 間の唐紙  
 を 明け放して下さる 貞一は 廣くなつたのと  
 にぎやかにつたのとを よろこびて 隣室の方  
 へばかり這つて行く  
 今日より 柱の霜といふ、此の土地の名産で、自  
 然薯より製した葛を 飲まして見るに 結果よろ  
 しきやうなれば これを 主要な食料にあつ  
 八月十二日 隣室の柱に 夕日さしたるを見て  
 うれしそうにエー／＼といひて指す  
 八月十三日 昨日の夕日の影を 思ひ出せしか、  
 柱の下に行き、物をさがす様子しては、這ひまわ  
 る、椽側をわちこちと 椅子をふして歩く  
 八月十四日 此頃食ひつく事 益々甚し、宿の女

中など、入らつしやいと、言つて近づく時は、わ  
 ざ／＼手を出して、女中の手を捕らへ、かみつく。  
 帽子といへば、帽子のかゝれる所をば見る。  
 八月十五日 日暮れてより 隣室の四人連と、父  
 母につれられ、修禪寺に詣でしに、参詣人の余り  
 強く鈴をならせしに、驚き大聲にて泣き出す、  
 八月十七日 父母と見晴しの山上に行き、歸途皆  
 宜園といふ、遊園に釣して遊ぶ、宿の女中、小魚  
 をすくひ瓶に入れてくれしに、ピヨイ／＼ととび  
 出すを見て氣味悪がりしも、終には兩手を入れて、  
 かきまわす。  
 帽子を渡せば、必自ら頭にいた／＼、外より内に  
 入れば直に、取らんとす、心ありてか 心なしに  
 かはわからねど、おもしろし。

八月十九日 父の齒磨楊子を、口にして、齒を磨

くまねして遊ぶこと久し、

八月廿二日 父風邪の氣味にて、終日臥す、貞一

枕許にすわりて 團扇もてあふぐ。

八月廿四日 獨按摩といふ、くりもの、道具あり、

それを渡し 母の腕をさすつてと 手眞似して

見せしに かもしろがりて 母の腕を なでまわ

す、

八月廿五日 今日十時半修善寺を出立す 大仁に

て 瀛車の來るを待つ間 父母の辨當など使ふ中

茶店の小女に負はれて遊ぶ、廿日ばかり、種々の

人に馴れ親みて、人見しりせぬ様になりたり瀛車

にのりては 例の大きからぬ眼を、強いて見張り、

外をさよろくと見る事、前日の如し、

歸宅早々 例の居間にて 貞チヤンの御家と 宮

様はと 問ひこゝろみしに 直ちにその方を指

して笑ふ

廿日間 山間に轉地したる爲 著しく肥満し 留

守居のばあやを驚かせたり

### 松方伯海外貯金のはなし

▲歐米相競ふて貯金を奨勵す 歐米諸國では、非

常の熱心を以て奨勵して居る、隨て其方法も百方

講究するといふ有様である、白耳義あたりでも郵

便貯金の金高は驚くほどに上つて居る、其方法は

大抵郵便切手を貼用する方法であるから、當に取

扱ひの簡便なのみでない、子供なども貯金するこ

とを一つの樂みとするほどであるから、自然盛ん

に行はれることになる、私は細かな表なども集め

たが、但れの國も何分金高の位が日本と雲泥の差

のあるのは耻しい